

〔翻 訳〕 (Übersetzung)

エックハルト・ヘフトリヒ 〔トーマス・マン〕『ヴァイマルのロッテ』 覚え書き (2)

(ヘルムート・コープマン編『トーマス・マン＝ハンドブック』

S. フィッシャー・ポケットブック出版社 2005年 437-446ページ所収)

六 浦 英 文 訳

『象屋旅館』の番頭 マーガーは新たな客の来訪を告げなければならない——それはアデーレ・ショーペンハウアー (Adele Schopenhauer) という客である。〔ゲーテの秘書〕リーマーも、その仲立ちをするかのように、この令嬢ショーペンハウアーを迎えることを、ロッテに勧める。それは、アデーレが、哲学者アルトゥル・ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer) の妹であるからではない。むしろ、その理由は、アデーレ嬢の母親がヨハンナ・ショペンハウアー (Johanna Schopenhauer) 夫人であるからであり、この母親は、「巨匠ゲーテに傾倒しているお友達で、自身でも文学に携わっていて、才気煥発なサロン [=文学・芸術愛好家たちの社交的サークル] の持ち主」(ein[e] ergeben[e] Freundin des Meisters, übrigens Literatorin sie selbst und Inhaberin eines geistreichen Salons) (GKFA 9.1, S. 128f./ GW II, S. 476) でもあるからである。「若き学者であり、哲学者」(ein junger Gelehrter, ein Philosoph) であるアルトゥルという兄は、後になって初めて言及される (GKFA 9.1, S. 198/ GW II, S. 540; GKFA 9.1, S. 155/ GW II, 500 でも既に触れられているが)。これ〔アデーレ・ショーペンハウアー嬢の話〕は、ロッテにとってだけでなく、まさに読者にとっても、「[……] 私どもの世界のさまざまな事情と人間関係について、いろいろと学べる機会」(eine Gelegenheit [...], über unsere Zustände und Verhältnisse manches zu profitieren) (GKFA 9.1, S. 129/ GW II, 476) になるので重要である。

このようにして、物語の幅が広がっていくのは、単にゲーテの生活世界 (Lebenswelt) の雰囲気や親密さを伝え、それによってこの偉大な人物の登場に舞台を整えるためだけではない。ゲーテ家の私生活や家族生活、そしてヴァイマル上流社会の複雑な人間関係への最初の洞察によって、むしろ、『ヴェールター』(*Die Leiden des jungen Werthers*) の登場人物が生身のロッテとしてヴァイマルに現れたという喜劇 (Komödie) が、リーマーによってすでに明らかになったように、「心の内なる問題を中心とするドラマ」(Innendrama) への視界を開くものとなる。この内面のドラマを通じて、頭を顫わせる老婦人という人物像は、当初は単なる滑稽劇 (Komik) に陥りかねなかったのだが、最終章におけ

る、想像力によって生み出された、しかし人間味あふれる精神的対話 (Geistergespräch) にふさわしい存在へと変貌を遂げるのである。

アデーレの快活な口調は、そこで触れられるテーマの深刻さを覆い隠すものではなく、ロッテは、それまで「ゲーテをめぐる愛の」「輪舞」(Reigen)として浮かびあがったものの具体的な現実と、たちまち直面することになる。すぐに「オティーリエ・フォン・ポグヴィッシュ」(Otilie von Pogwisch)という名前が挙がる。つまり、父親ゲーテが息子のために選んだ将来の妻 (GKFA 9.1, S. 134/ GW II, S. 481) の名前が挙がり、同様に「最近亡くなったゲーテの妻」(jüngst dahingegangene[] Frau von Goethe)の話も出る。そして、「枢密顧問官夫人 (Geheime[] Rätin)であるゲーテの妻について語る場合に、アデーレが「叔母さま」(Tante)と呼んでいたことについて触れると、ロッテはゴシップ話をするような口調で、まるで信じられないというようにこう問い返す。「あのヴルピウスのことなの？」(Die Vulpius?) (GKFA 9.1, S. 136/ GW II, S. 483)と。しかし、当時はただの一夜の情事相手としてしか容認されていなかったヴルピウスと、ゲーテが、のちに結婚したことに、「フォン・シュタイン男爵夫人」(die Baronin von Stein)が腹を立てていたのではないかと、ロッテがみずから詮索することで、ゲーテ夫人ヴルピウスという名前が挙がったのである。それによって、文学的な「輪舞」(Reigen)は、やがてキスから子供たちが生まれるという実存的なものへと変容したのである。

第四章の終わりで、アデーレは確実に起こるかのようこう述べる。ゲーテの息子とオティーリエとの間で、その後実際に1817年に執り行われることになる結婚にともなって、二人の宿命的な破滅物語が、ゲーテによって引き起こされるはずである、と。アデーレはそれを「必然的にそうなるとはまったく言えないはずなのに、それにもかかわりませず、どうにも避けようがないように見えます運命に巻き込まれているのでございます」(ein ganz und gar unnotwendiges und dennoch scheinbar unabwendbares Schicksal)と表現している。「オティーリエという」「まことに愛らしくて、まことに気高くて、幸福になるに値するお方」(das holdeste, edelste, des Glückes würdigste Geschöpf) (GKFA 9.1, S. 148/ GW II, S. 494)が、運命という罫に、今にも絡め取られようとしている。しかし、そのような絡め取りに責任があるとすると、それは息子ではなく、「オティーリエに興味を持った最初の人物が」(der erste war, der sich für Ottilien interessierte)父親のほうだからである。このように父親の興味によって初めて「令息の注意」(Aufmerksamkeit des Sohnes)がオティーリエという女性に向けられたのであり、実のところ、これは「父親の意向に」「依存する形で、引き継いだ」(um Abhängigkeit und Übernahme) (GKFA 9.1, S. 158/ GW II, S. 503)恋愛という問題にほかならない。息子と父親との寡欲さのこの苦悩に満ちた変異形 (Variante) は、ロッテにとって、かつてのテーマが歪んで再現されたかのように映ったに違いない。アデーレの解釈によれば、そのテーマは今やこうなる。「それはあたかも、令息の若さを通じて、令息の中で若返って、父親自身がオティーリエの愛を求めているとでもいうようでした。〈若いゲーテ〉がオティーリエを愛したというわけでございます、——オティーリエはほとんどためらわずに、〈若いゲーテ〉を、

運命によって自分に与えられた人、自分を覚醒させる人というふうに見ましたし、自分のほうでも、その愛に答えて〈若いゲーテ〉を愛しているのだと考えて、何ら疑うところがなかったのでございます。」(Es war ja, als ob durch die Jugend des Sohnes, verjüngt in ihm, der Vater selbst um sie würde. Der »junge Goethe« liebte sie, — sie zögerte kaum, den Erwecker, den Mann ihres Schicksals in ihm, zu sehen, sie zweifelte nicht, ihn wiederzulieben.) (GKFA 9.1, S. 158 / GW II, S. 503)

昔から、ロッテは、フリーデリーケ・ブリーオン (Friederike Brion) に対して嫉妬していたし、〔ゲーテをめぐる展開される〕輪舞を構成するその他の女性たちに対しても妬心を燃やしていた。今や、この精神的な反応 (d[ie] seelischen Reflexe) の表層が破れ、深層が露わになる。そこには、ジークムント・フロイト (Sigmund Freud) 以前から、近親相姦的な混乱 (die inzestuöse Verwirrung) が潜んでいたのだ。そしてついに「御料局顧問官フォン・ゲーテ [=ゲーテの息子]」(Herr Kammerrat von Goethe) (GKFA 9.1, S. 220 / GW II, S. 560) が次の訪問者として現れると、アデーレは、哲学者の兄が世界をその二重概念 (Doppelbegriff) に還元しようとするのとはほぼ同じくらい早々に、愛の世界を、極めて鮮明でありながら混乱を招くような共通の分母 (Nenner) へと還元する。アデーレの「頼み」(Bitte), 「懇願」(Beschwörung) (GKFA 9.1, 223 / GW II, 563) とは、つまり、ロッテが、〔今は〕父親〔となっているゲーテ〕との、かつての愛にかかわる人間関係を経験し、今はそれによって「支えられ」(gestützt auf das) ているように、〔ゲーテの〕魅惑の犠牲になること (das Opfer einer Fascination zu werden) からオティーリエを守って欲しい、という願いなのだ。「奥様が、ご自分の叡智に従ってお選びになったご主人様は、」(Der Mann, dem Sie in Ihrer Weisheit folgten)——すなわち〔ロッテの配偶者〕ケストナーのことであり、〈アルベルト〉という名前で『ヴェールター』にも登場している——「すでにこの世を去られました。また、アウグストの母親になりましたご婦人も、もはやこの世の人ではありません。奥様だけが、あのお父様と、奥様のご子息と申してもよろしいアウグストと、奥様のお若いときに生き写しの愛らしいオティーリエと、一緒に生きておいでになるのでございます。——奥様のお言葉は母親の言葉も同然なのでございます」(ist dahin, die Frau, die Augstens Mutter wurde, ist auch nicht mehr. Sie sind allen mit dem Vater, mit dem, der Ihr Sohn sein könnte, und der Lieblichen, die Ihr Tochterbild ist. Ihr Wort kommt dem einer Mutter gleich.) (GKFA 9.1, S. 223 / GW II, S. 562f.)。第四章 (アデーレに関する本来の章) と、第六章 (アウグストが父親からの招待を伝え、その昼食会の様子が第八章で語られる) との間に、タイトルを持つ唯一の章が挟まれている。それは「アデーレの物語」(Adele's Erzählung) (GKFA 9.1, S. 150 / GW II, S. 495) である。その結末で、語られた内容を、語り手は「私の短篇小説」(meine Novelle) (GKFA 9.1, S. 218 / GW II, S. 558) と呼んでおり、事実、この挿入部はまさにそのような短篇小説といってもよい。挿入されたこの章は、トーマス・マンにとって、晩年のゲーテの語り口 (Erzählmanier) を、間欠的な発話表現形式 (die intermittierende Form) に至るまで模倣するためだけに役に立っているだけではなく、ヴァイマル社会やゲーテ家の数多

くの内情に加え、それまで触れられていなかったが、これ以降ますます力強く膨らんでいく主要なテーマ——すなわち政治的なもの (das Politische)——を導入する機会をも提供している。ヴァイマルの若者たちの間でも広まっていた、ナポレオン (Napoléon Bonaparte) への憎悪に煽られた国民的熱狂に対し、ナポレオンへのゲーテの孤独な賞賛はこれに対立する立場である。しかし、ゲーテは「皇帝〔ナポレオン〕の中に、まさに世界秩序を司る主であるジュピターを」(in dem Kaiser nun einmal den Jupiter, das weltenordnende Haupt) (GKFA 9.1, S. 167 / GW II, S. 511) 見出したのである。この構図は、〔一方において〕解放戦争 (Befreiungskrieg) に関する逸話をアデーレの語りとして織り込む機会を与えるだけでなく、〔他方において〕ゲーテとともに、そしてゲーテを超えて、トーマス・マンにとってかねてよりドイツにかかわる苦悩 (Leiden an Deutschland) となっていたあらゆる事柄を論究する契機をも提供している。歴史的な資料は、十分なほどあるし、とりわけゲーテの対話集の中に豊富に見つかった。資料は、組み合わせることもできるし、あるいは予言的な意味合いを強めることもできた。アデーレは、「巨匠ゲーテ」(der Meister) が若者の一人に「お目玉をくわせた」(den Kopf wusch) 仔細を「自分の耳で聞いていた」(mit eigenen Ohren gehört) (GKFA 9.1, S. 165 / GW II, S. 510)。「善意をもって純粋な気持ちで考える」(gut und rein zu meinen) というだけでは十分とは言えない。

われわれは、自分がやっていることから出てくるいろいろな結果をも見極めることができなければならないのです。わたしにはあなたのやっておいでになることが恐ろしい、と申しますのも、それは今のところではまだ高貴な、潔白なものですが、しかし、他日ドイツ人のあいだで公然と非常に恐ろしい愚行となって現れる何か物凄いものの最初の形だからで、その物凄いものたるや、もし幾分でもあなたの耳に達するとしますならば、あなたご自身が墓の中で顛倒なさるようなものだろうと思われます

(man muß auch die Folgen abzusehen vermögen seines Betreibens. Vor dem Ihrigen graut mir, weil es die noch edle, noch unschuldige Vorform ist von etwas Schrecklichem, das sich eines Tages unter den Deutschen zu den grassesten Narrheiten manifestieren wird, und wovor Sie selbst sich, wenn etwas davon zu Ihnen dränge, in Ihrem Grabe umkehren würden. (GKFA 9.1, S. 166f. / GW II, S. 511))

確かに、トーマス・マンが自身の政治的葛藤を織り込んだ『ファウストゥス博士』(*Doktor Faustus*) において初めて、あの大審判の日 (der große Gerichtstag) が描かれることになる。しかし、ゲーテ小説 (Goethe-Roman) においても、そこにはヒトラー時代の陶酔的風潮だけでなく、1914年以降の戦争関連著作品の著者マン自身が感染していたあの高揚状態も暗示されているのである。したがって、「興奮して、酔い痴れて、一様な情熱のために感激させられると同時に精神的には下落させられた人びとの挙動」(Gebaren der aufgeregten, berauschten, von einheitlicher Leidenschaft zugleich erhobenen und geistig her-

abgesetzten Menschen) に見られる不条理な滑稽な点は、ナポレオンとの戦いが始まったころのフィヒテ (Johann Gottlieb Fichte), シュライエルマッハー (Friedrich Schleiermacher), イフラント (August Wilhelm Iffland) といったベルリンの連中に限ったことではない。同様に、「全国民誰もが詩を詠み、黙示録的幻想に耽り、その中を泳ぎまわっていた」(Das ganze Volk dichtete, es schwelgte und schwamm in Apokalypsen) (GKFA 9.1, S. 193/ GW II, S. 535) のである。

アデーレはまた、「ついに爆発するかのように大騒動のときがまいりまして、それにはいつものことながら、政治的な問題と個人的な問題とが混ざり合っていたのでございます」(Eclat, in dem, wie immer, Politisches und Persönliches sich vermischten) (GKFA 9.1, S. 208/ GW II, S. 549) と語りだす。いつものことながら! (Wie immer!) これは、著者が読者に、ゲーテ小説の中にも、マン家における兄弟間の確執 (Bruderzwist) として知られるあの葛藤の痕跡 (Spuren jenes Konfliktes) を探るよう促しているのだ。この葛藤は、1915年の兄ハインリヒ (Heinrich Mann) の『ゾラ』論随筆 (Zola-Essay) より数年前に、この兄の『ヴォルテールとゲーテ』(Voltaire-Goethe) においてすでに始まっていたのである。

第六章

ゲーテの息子が、その名前に『親和力』([Die] Wahlverwandtschaften) の犠牲者の姿を連想させる少女 [=オティリーエ] と将来結婚することになりそうな状況 (GKFA 9.1, S. 214, 277/ GW II, S. 554, 612 参照) を、アデーレは「逃れられぬ運命のもたらす陰鬱な、厚かましいほどの押しの強さ」(die düstere Unverfrorenheit des Verhängnisses) (GKFA 9.1, S. 217/ GW II, S. 557) と呼んでいる。神話的であり、同時に悲劇的でもあるものへの共感には、定型に従って生き、その足跡をたどることが含まれる。しかし、輪舞のような反復の代わりに、[ゲーテの] 息子と向き合うのは、「[……] 自己を繰り返して、時の中でふたたび表面に出て、ふたたび現在になろうとする生の変化した不十分な試み」(abgewandert-unzulängliche Versuch des Lebens, [...] sich zu wiederholen und wieder oben-auf in der Zeit, wieder Gegenwart zu sein) (GKFA 9.1, S. 227/ GW II, S. 566) に他ならない。「偉大な人物の息子」(Der Sohn eines Großen) であること——アデーレはこの運命を、「これは非常な幸福で、たいへん気持ちの良いことではありますが、また、非常な重荷で、自分の自我を絶えず辱めることでもあります」(ein hohes Glück, eine schätzbare Annehmlichkeit und eine drückende Last, eine dauernde Entwürdigung der eigenen Selbstheit doch auch wieder) (GKFA 9.1, S. 160/ GW II, S. 504) と説明していた。恵まれた幸福のことはもはや問題にもされず、アウグストはみずからその屈辱を名指しでこう述べる。「私は、父の身体からかりそめに生み出された、ほとんどとりのえない、添え物のような存在にすぎないのです」(Ich bin nur ein beiläufiger, mit wenig Nachdruck begabter Abwurf seiner Natur.) (GKFA 9.1, S. 233/ GW II, S. 572)。しかし、そのような自覚が、自尊心を得る助けになるはずもない。どのように咳ばらいをし、いかに唾を吐くか、それは、その

言葉の滑稽さにさえ気づかないほど、アウグストが父親を見て覚えたものである。もちろん、アウグストは〔平民出身で素朴な〕母親の〔凡庸な〕息子としても〔常に父の天才と比較される宿命のもとに生きざるを得ない〕犠牲者である。アウグストは、オティーリエを、それと共に父の選択を、守り続けなければならない、と依然として信じている。というのも、「単に生まれや素性によって名門貴族になったにすぎない輩が、天才によって貴族になった人間〔ゲーテ〕に加える厚顔不遜な行為」(Frechheit der bloßen Geburt und Natur des blauen Blutes gegen den Adel des Genies) (GKFA 9.1, S. 239/ GW II, S. 577) に対して、激しい怒りを抱いているからである。

隠された意味を含んだイロニーといえるのだが、著者マンは、はからずも、宿命的で不幸な結果を招く自然の反復 (Wiederholung der Natur) という表現によって、ゲーテの人生において、若いマリアンネ (Marianne von Willemer)——マリアンネは、養父である枢密顧問官ヴィレマー (Johann Jacob von Willemer) の妻となったばかりの若い女性なのだが——との恋愛情熱 (Liebespassion) に現れた反復の秘密 (das Geheimnis jener Wiederholung) を、ロッテに明かす役目を託している。ロッテの「まるで小説のようなお話でございすわね」(Das klingt nach einem Roman) (GKFA 9.1, S. 242/ GW II, S. 580) という一言は、ロッテがすぐに核心を突いていることを示している。しかし、この場合、詩人ゲーテの節度は、第二の『ヴェールター』(Werther) を生み出すことはなく、情熱と諦念 (Leidenschaft und Entsagung) の結びつきから『西東詩集』(West-östlichen Divan) という果実として実ったのである。息子アウグストが、ヴィレマー家において「しかるべく処理をされ、解決され、明朗化された関係を背景にしてこそ、客になった父の心地よい満足感 は〔……〕いや増しに増す」(auf dem Hintergrund der so geordneten, bereinigten und geklärten Verhältnisse sein Behagen als Gast [...] erst recht entwickeln) ことができたのです、と父親ゲーテの立場に感情移入する様子は、実に繊細なユーモアに満ちている (GKFA 9.1, S. 243/ GW II, S. 581)。

リーマーと同様、アウグストもゲーテの生涯と作品について該博な知識を有しており、その話には、ゲーテの言葉遣いや表現方法、文字通りの引用さえも織り交ぜられている。それゆえに、いくつかの箇所は、トーマス・マンがエッセイの中で、ゲーテについて言及したり、ゲーテを権威として援用したりする際によく用いる表現と、一致することになる。リーマーやアウグストが、トーマス・マンの描くゲーテの精神に則って語っているように見えるとき、それは時として、著者マンの少なくとも部分的な自己告白にまで先鋭化されることさえある。とはいえ、読者は決して忘れてはならないことだが、ここで語っているのは犠牲者 (Opfer) 〔リーマー〕であり、模倣者 (Imitator[]) 〔アウグスト〕であり、すなわち、傷ついた者たちであり、この二人には、ロッテがフリーデリーケについて述べたことが当てはまるのだ。すなわち、この二人にとって、あきらめる (die Entsagung) とは萎縮 (Verkümmerung) を意味しているということである。「萎縮こそが一番恐ろしいことなのでございます」(Verkümmerung ist das Schrecklichste.) (GKFA 9.1, S. 250/ GW II, S. 587)。しかし、息子アウグストが、ゲーテの言葉で装われたトーマス・マンの本当の

信念を、再現するとき、アウグストは、やはり父に比べると機能不全な (insuffizient[]) 症状を示すような模倣者でしかない。こういう事態は、息子の発言を単なる意見として相対化させるものではなく、そういう発言を、苦しみを与えるもの (vexatorisch), いや不気味なもの (unheimlich) にしてしまう。アウグストが、オティーリエはロッテの娘かもしれない、と主張した際のロッテの反応について具体的に述べられていることが、ここにも基本的に当てはまる。ロッテは「不気味な感覚に襲われた」(von einem Gefühl der Spukhaftigkeit angerührt) (GKFA 9.1, S. 276/ GW II, S. 611) のである。

「きょうから三日後に」(in drei Tagen von heute) という日付で、〔ロッテがゲーテ家から〕午餐会への招待が提示される場面 (II, 616) では、またしても、著者マンによる隠された暗示が不気味な効果を発揮している。これは、すでにリーマーの章〔第三章〕を、大胆にもゼウスとイエスとの類似性を想わせるゲーテ伝説 (Goethe-Legende) で締めくくっていた著者マンが、今また敢えて仕掛けたものだ。イエスが「三日後に復活する」と予言したことを思い起こせば、ロッテがわざわざ「ではさようなら、わたくしの子のようなあなた、三日後にお昼をいただきにまいりますわ——まいりますとも」(Geh Er, mein Sohn, über drei Tage kommt' ich zu Mittag — warum denn nicht?) (GKFA 9.1, S. 282/ GW II, S. 617) と繰り返していることを考えると、これを単なる偶然だと考えることはますます難しくなるであろう。〔下線訳者〕

第七の章、および第八章

第六章の終わりにアウグストが申し出る午餐会への招待は、ゲーテ家では第七の章の終わりになってようやく決定される。「よし、それでは三日後にということにしよう」(Gut, so sei es über drei Tage) (GKFA 9.1, S. 367/ GW II, S. 694)。第七の章は、〔他の章とは異なり〕最初から定冠詞が数字の前に置かれる唯一無二の章として、つまりこの小説の核心として、際立った表示がなされているのだが、たとえそれがなかったとしても、〔物語の〕時系列の断絶を示しているだけでも、ひととき際立って見えるであろう。この第七の章で、読者はゲーテ本人と対面することになる。そしてその後、第八章で、青春時代の友人であったゲーテが、年老いた女性ロッテと出会う場面を見守るとき、読者は目撃者として、ロッテとは異なる形で、この芝居の幕を体験する心構えをさせられるのである。ロッテにとって、それは非常に複雑で心の相克をとまなう出来事となるのは避けがたいことであろう。「目の前の人物は、あのときの青年であったが、そうでもなかった」(Er war es und war es nicht) (GKFA 9.1, S. 387/ GW II, S. 4711)。なぜなら、「この当時、ゲーテは六十七歳だった」(Goethe war damals siebenundsechzig.) からである。それにもかかわらず、ロッテは「今、このゲーテに再会できたことは幸運だといってよかっただろう。十五年前ではなく」。なぜなら、「ゲーテの姿は(……) 最近の十年間に、ふたたび青年時代の姿にずっと近づいて」(seine Figur [...] sich im letzten Jahrzehnt derjenigen des Jünglings wieder mehr angenähert) いたからである (GKFA 9.1, S. 387/ GW II, S. 712)。

では、この物語全体は、喜劇において、実際にも決して珍しいことではないのだが、幻

滅 (Desillusionierung) へと収束していくのだろうか。ただ、ここではその幻滅が和らげられ、笑いも控えめになっているのではあるが。結局のところ、第七の章の終盤、アウグストが宮廷顧問夫人ロッテのヴァイマル到着を知らせる手紙を届け、人びとが『ヴェルター の悩み』のヒロインを一目見ようと旅館の前に群がっていることを伝えた際、ゲーテはすでに次のような感想を漏らしている。「過去が、愚かしさと手を組んで、わたしに謀叛を起こして、面倒や混乱を惹き起こそうとしているのだ。あのおばあさんは自分を抑制して、わたしに面倒をかけないようにするわけにはいかなかったのだろうか？」(Die Vergangenheit verschwört sich mit der Narrheit gegen mich, um Trouble und Unordnung zu stiften. Konnt' sie sich's nicht verkneifen, die Alte, und mir's nicht ersparen?) (GKFA 9.1, S. 367/ GW II, S. 694)。今回は、〔息子〕アウグストにも、父〔ゲーテ〕にも——そして、いつもそれを忘れてしまう読者にも——、「宮廷顧問官夫人〔ロッテ〕」(die Frau Hofrätin) がヴァイマルを訪れるのは「まったく正当な権利」(völlig in ihrem Recht)であることを改めて思い出させる必要がある。すなわち、「夫人は、親愛なる親戚であるリーデル家を訪問するためにやってきているのだ」(Sie besucht ihre lieben Verwandten, die Riedels.) (GKFA 9.1, S. 367/ GW II, S. 694) ということ。ゲーテ——ここでは完全に、『ヴァイマルのロッテ』(*Lotte in Weimar*) という題名を持つこの小説の登場人物ゲーテのことだが——は、ケストナー未亡人〔ロッテ〕がヴァイマルにいる姉を訪ねるのが、単なる口実にすぎない、と邪推することで、ロッテに不当な扱いをしているのだ。しかし、ゲーテが「それというのも、あの夫人〔ロッテ〕は名声をつまみ食いたいからだよ」(Denn Ruhm möcht' sie naschen.) (GKFA 9.1, S. 367/ GW II, S. 694) と不機嫌そうに主張する場合、それには、正しさも含まれているのではないだろうか。

確かに、トラブルや混乱はコメディーにはつきものだが、この作品を、〔第一章から第六章までの〕先行する章からすでに予感されるような、従来のジャンルを完全に超越した高みへ (ganz auf seine, die analoge Gattung sprengende Höhe) と引き上げるためには、現代小説 (der moderne Roman) ならではの描き方で、すなわち、第七の章の独白の反復進行 (in der Monolog-Sequenz) という形式の中で、ゲーテが登場しなければならない。

そして第八章で、ゲーテは、「あまり儀式ばらずに」(ohne viel Feierlichkeit)、とはいえやはり「儀式どおりに」「閣下がお見えになります」(Seine Excellenz) と予告紹介され、「しっかりとした、歩幅の短い、いくぶん小刻みな足取りで」(bestimmten und kurzen, etwas abgehackten Schrittes) 登場し、「両肩を反らし、下腹を少し突き出して」(die Schultern zurückgenommen, den Unterleib etwas vorgeschoben) (II, 711)、さらに燕尾服、靴下、勲章、スカーフに至るまで、『ブデンブローク家の人々』(*Buddenbrooks*) ですでに完璧に習得されていた写実的な手法で描写される。そのとき、第七の章のおかげで、それなしではリーマーやアウグストの尽力にもかかわらず、ほぼ避けられなかったであろう「対面の場面を描く」事態を恐れる必要はもはやない。すなわち、あの「老女」(Alte[])〔ロッテ〕と対をなす存在として、偉大な人物〔ゲーテ〕が、風刺画で表現された自身の姿、あるいは、場合によっては自身の亡霊を演じなければならないような、芝居の見せ場

(Theatercoup)を描くことである。

第七の章では、それまでの〔ゲーテにかかわる〕すべての話題／問題／主題／テーマ(Themen)が、〔音楽のストレッタ(Sretta/stretto)手法〔フーガなど対位法音楽において、主題が完結しないうちに応答部が現れる手法〕のように〕、密接追拍して提示され展開される(Eng- und Durchführung)だけではない。〔ゲーテにかかわる〕さまざまな問題テーマを熟知し、ゲーテという影を背負った人物たちが、〔ゲーテとの〕親密な人間関係(Intimität)があるにもかかわらず、自分たちの背負い込んだ問題テーマが、それまでのところ、あくまで外側から描かれたものに過ぎないことも、間接的に明らかになる。確かに、アウグストが、宮廷顧問官夫人〔ロッテ〕に、「詩人である父の作品と生活は「非常に一致して一体となっているものなのですから(……)、正確に言いますと、作品か生活のどちらか一つを言うだけでよいので、作品のことを生活のこととして語り、また、生活のことを作品のこととして語ることができると思われます」(so weitgehend eins [...], daß man, genau genommen, nur eines zu nennen brauchte und von dem Werke sprechen könnte) (GKFA 9.1, S. 249/ GW II, S. 586)と説くのは、間違っていない。そしてアウグストは、マリアンネとズライカのつながりの謎(das Geheimnis der Marianne-Suleika-Verbindung)を解き明かすことで、その見方を説得力を持って示しているように見える。その分析は、単なる書誌学的範囲をはるかに超えている。もちろん、それは、はるか後世の何世代にもわたるゲーテ研究によって発見され、トーマス・マンによって伝えられたあらゆる知見を踏まえた上でのことである。しかし、第七の章における、覚醒と想起、そして詩的構想の間を滑るように流れる独白が喚起するさまざまな連想(die Assoziationen)こそがはじめて、生活と作品、そして詩と経験や想起がどのような関係にあるかを真に明らかにする。創造の過程そのものとして、明らかにするのである。したがって、想像の過程は、もはや記述されるというよりは、それ自体が生起するものである。そこで、夢やビジョンから造形へと突き動かすものは、ゲーテが、魔神的なもの(das Dämonische)と呼び、詩に詠んだあの力(Kraft)の表れであり、ゲーテは、その力が、破壊者とも言うべき行為者である行動家たち(d[ie] Handelnden)の中にも、芸術家たち(Künstler)の中にも働いていると見ていた。こうして、「魔神」(Dämon[])という言葉は、第七の章のモノローグの最初の文(GKFA 9.1, S. 283/ GW II, S. 617)ですでに登場する。

ここでは、トーマス・マンの伝統に深く根ざした文体が許す限り、ゲーテをありのままに、すなわち感覚的かつ情感豊かに、イメージの中で想起し、詩的に構想を巡らせつつも、同時に理性を働かせ、〔生活の〕邪魔をする「昼間の妖怪」(Tag-Spuk)に抵抗する姿として描こうとしている(GKFA 9.1, S. 289/ GW II, S. 623)。ゲーテは、その妖怪に、不可欠な敬意を計画的に捧げつつ、さらにそのことに不平を漏らし、それからまた格言の中で省察する——要するに、ゲーテの全貌が、それも内面から描かれるため、この〔第七の〕章における引用や 当てこすりの織り成す構造は、リーマーが論じた独白的な部分においてさえもそうなのだが、それよりもはるかに緻密で豊かなものとなっている。その点で、著者マンを非難するのは、まるで『ファウストⅡ』(Faust II)の大部分がギリシャ神話に精

通していなければ理解できないという事実を、ゲーテの美的欠陥として責めようとするのと同じくらい不条理なことである。第七の章の独白に『ディーヴァン〔西東詩集〕』(Divan)だけでなく『ファウストII』の続きが挿入されているという事実は、単に1816年という年の作品や、恋愛に関する歴史的事実だけに関係しているわけではない。

それゆえ、第八章における午餐会の場面が、再会の単なる幻滅コメディー([die] bloße[] Desillusionierungskomödie der Wiederbegegnung)へと墮し、宮廷を率いる閣下としての精神界の王者(Geistesfürst[])と、親しげにへつらう取り巻きたちとの相互依存関係を風刺的に暴くだけのものへと転落してしまうなどということは、到底考えられないことである。とはいえ、トーマス・マンは、平凡でありながら教養もある側近たちの卑屈な態度に、自身のヒロインであるロッテを愕然とさせている。さらにマンは、側近たちが「根本的にナンセンス」だと見なした中国人の言葉に対して、抑えきれないほどの哄笑の嵐を爆発させてそれに応じる光景に対して、ロッテに「幽霊が跳梁跋扈するような幻影」(spukhafte Vision)を思い浮かばせる場面を遺している。ゲーテが、ドイツ人、ユダヤ人、中国人の比較考察の中に織り込んだ中国人の言葉とは、「偉人は社会の不幸なり」(Der große Mann ist ein öffentliches Unglück.) (GKFA 9.1, S. 411 / GW II, S. 734) というものである。

確かに、幻滅は極限まで推し進められ、ロッテと青春時代の友人〔ゲーテ〕との想像上の対話、すなわち和解的で控えめな結末〔第九章〕のクライマックスに先立ち、「あの有名な女性〔ロッテ〕が、同じく有名な都市〔ヴァイマル〕に滞在したことについて」(über den Aufenthalt der berühmten Frau in der ebenfalls so berühmten Stadt)、もっとも冷静な語り手の報告が置かれている。もっとも、「私たち」(wir)はそれについて「あまり多くを知らない」(nicht allzuviel)のだが (GKFA 9.1, S.429 / GW II, S. 749)。ゴシップの混じった、幻滅を誘うような詳細な記述は、シャルロッテが実の息子アウグストに午餐会の様子を報告した「私たちの手に残されている〔現に読むことのできる〕手紙」(in einem uns vorliegenden Briefe) (GKFA 9.1, S. 431 / GW II, S. 751)で頂点に達する。小説に組み込まれた〔息子に宛てた〕この手紙の出典資料(DüD II, 536 参照)によれば、次のように記されている。「ただ、一言だけ申しますと、一人の老人と新たに知り合いになりましたが、その老人がゲーテだということがわかっていなかったら、あるいは、わかっていたとしても、決して好ましい印象を受けなかった、というぐらいのことです」(Nur so viel, ich habe eine neue Bekanntschaft von einem alten Manne gemacht, welcher, wenn ich nicht wüßte, daß es Goethe wäre, und auch dennoch, keinen angenehmen Eindruck auf mich gemacht hat.) (GKFA 9.1, S. II, 751頁)。この手紙は、〔小説の冒頭の第一章で〕ロッテが丹念に準備した——つまり完全にトーマス・マン自身が執筆したものであるが——〔ヴァイマル訪問の目的をゲーテに述べた〕告知の手紙(II, 387)と比較することで、語り手によって、ユーモラスに相対化されているのだが、それだけでなく、〔最終の第九章で〕劇場からの帰り道、馬車の中で、〔ロッテの前に〕ゲーテが「出現」(Erscheinung)することによってその手紙の内容が打ち消されることになる。ゲーテの出現は、「かつてオシアン

(Ossian) やクロプシュトック (Friedrich Gottlieb Klopstock) の詩を、ケストナーの婚約者〔ロッテ〕に朗読したあの声」(mit der Stimme, mit der er einst der Braut aus dem Ossian, dem Klopstock vorgelesen) で、ロッテに語り掛けることによって始まる (GKFA 9.1, S. 436/ GW II, S. 756)。その白日夢のような、想像的、すなわち詩的な対話は、ここで語られている死をも包含する変化 (Wandlung) そのものの一部である。「ねえ、変容 (Metamorphose) ということこそ、君の友人であるわたしの最も愛するもの、心の最も奥底に秘めているもの、わたしの大きな希望で、最も深い欲望なのです。」(GKFA 9.1, S. 445/ GW II, S. 763f.)。

『ばらの騎士』(Der Rosenkavalier)^{訳注1)} では、若い恋人たちの最後の二重唱 (ソフィー:「夢に違いない、現実のはずがない、/ 私たち二人が一緒にいられるなんて、/ いつまでも、/ 永遠に!」(Sophie: »Ist ein Traum, kann nicht wirklich sein,/ daß wir zwei beieinander sein,/ beieinander für alle Zeit/ und Ewigkeit!«) の後に、落としたハンカチを拾う小さな黒人の登場と退場が続く。『ヴァイマルのロッテ』において、「外套をまとしてロッテの傍らに座っている人物」(die Gestalt des Mantelträgers an ihrer Seite) (GKFA 9.1, S. 444/ GW II, S. 763) が、「昔聞いた懐かしい声」(die frühvernommene Stimme) で口にする最後の言葉は、こうである。「愛しい人たち、どうかわたしの静かな胸の中で安らかに眠って欲しい——そして、私たちがいつの日かふたたびともどもに目覚めるとき、それはどんなにうれしい瞬間になることでしょう」(In meinem ruhenden Herzen, teure Bilder, mögt ihr ruhen — und welch freundlicher Augenblick wird es sein, wenn wir dereinst wieder zusammen erwachen.) (GKFA 9.1, S. 445/ GW II, S. 764)。ロッテがささやいた「お年を召したこの先とも安らかに過ごしてくださいよう!」(Friede deinem Alter!) という言葉に続き、品よく燕尾服の裾をひらひらさせながら番頭マーガーが、急ぎ足で出迎える。ロッテが馬車から降りるのに手をかしながらこう述べる (GKFA 9.1, S. 446/ GW II, S. 765)。「ヴェールターのロッテが、ゲーテの馬車からお降りになるのに手をおかしくなんて、これは格別な体験でございます——何と申したらよいのでございましょうか。まことに記録すべき価値のある体験でございます」(Werthers Lotte aus Goethes Wagen zu helfen, das ist ein Erlebnis — wie soll ich es nennen? Es ist buchenswert.)。

エックハルト・ヘフトリヒ

【テキスト】

- (1) Eckhard Heftrich: *Lotte in Weimar*. (1) In: H. Koopmann (Hrsg.): *Thomas-Mann-Hand-*

1) 【訳注】 E. ヘフトリヒは、『ロザムンデ』(*Rosamunde* 1823年成立, 同年初演) [テオドール・ケルナー (Theodor Körner) 作 [音楽史上、正しくはヘルミーナ・フォン・シェジー (Hermine von Chézy) 作], フランツ・シューベルト (Franz Schubert) 作曲] を『ばらの騎士』(*Der Rosenkavalier* 1910年成立, 同年初演) [フーゴ・フォン・ホーフマンスタール (Hugo von Hofmannsthal) 作, リチャルト・シュトラウス (Richard Strauss) 作曲] と取り違えている可能性がある。

buch. Stuttgart: Alfred Kröner Verlag 1990, S. 423-437.

- (2) Eckhard Heftrich: *Lotte in Weimar*. (1) In: Helmut Koopmann (Hrsg.): *Thomas-Mann-Handbuch*. Frankfurt a. M.: S. Fischer Taschenbuch Verlag 2005, S. 423-437.

上記の(2)は(1)のライセンス版であり、内容は同じである。

【訳者注】

訳文中の〔……〕内は訳者注を示す。

【原著者による文献リスト】

- H. Kesten, *Thomas Manns Goethe*, in: *Das neue Tagebuch* (Paris) 7, 23. 12. (1939), S. 1216-1219.
- C. Helbling, *Thomas Mann und Goethe*, in: *Neue Rundschau* 8 (1940), S. 48-58.
- R. Kayser, *Thomas Mann : »Lotte in Weimar«*, in: *The Germanic Quarterly* 13 (1940), S. 173-176.
- St. Zweig, *Thomas Mann : »Lotte in Weimar«*, (1943), in: St. Zweig, *Begegnungen mit Büchern. Aufsätze und Einleitung aus den Jahren 1902-39*. Hg. von K. Beck, Frankfurt am Main 1983, S. 130-132.
- B. Blume, *Thomas Manns Goethebild*, in: *Publications of the Modern Language Association of America* 59 (1944), S. 261-290.
- E. Cassirer, *Thomas Manns Goethe-Bild. Eine Studie über »Lotte in Weimar«*, (1945), in: *Thomas Mann*, hg. von H. Koopmann, Darmstadt 1975, S. 1-34 (*Wege der Forschung* 135).
- B. Blume, *Thomas Mann und Goethe*, Bern 1949.
- R. Haage, *Thomas Manns »Lotte in Weimar« Eine Bereicherung unseres Goethe-Bild? Ein Vortrag*, Kiel (1949).
- G. Schaeder, *Thomas Manns Goethebild*, in: *Die Sammlung* 4 (1949), S. 499-514.
- E. Zapfel, *Thomas Manns »Lotte in Weimar«*, Diss. (masch.) Wien 1950. S. 90-105.
- L. Oestreich, *Maß und Zahl in Thomas Manns Roman »Lotte in Weimar«*, in: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Universität Greifswald* 1 (1951/52).
- J. Asher, *Thomas Mann's »Uniomystica« with Goethe*, in: *Publications of the English Goethe Society* 25 (1956), S. 1-20.
- H. Eichner, *Thomas Mann and Goethe. A Protest*, in: *Publications of the English Goethe Society* 26 (1957), S. 81-92.
- E. Havenith, *Bemerkungen zur Struktur des Goetheromans »Lotte in Weimar«*, in: *Revue des langues vivantes* 27 (1961), S. 329-341.
- F. Bentmann, *Goethe in der Sicht Thomas Manns*, Karlsruhe 1962.
- E. Braemer, *Aspekte der Goethe-Rezeption Thomas Manns*, in: *Vollendung und Größe Thomas*

- Manns. Beiträge zu Werk und Persönlichkeit des Dichters*, hg. von G. Wenzel, Halle 1962, S. 162-195.
- W. Grube, *Goethes Sekretär Ernst Carl John. Sein Bild in der Forschung und bei Thomas Mann*, in: *Goethe. Neue Folge des Jahrbuchs der Goethe-Gesellschaft* 24 (1962), S. 202-223.
 - L. Feuerlicht, *Thomas Manns mythische Identifikation*, in: *The German Quarterly* 36 (1963), S. 141-151).
 - K. Dickson, *The Technique of a »Musikalisch-ideeller Beziehungskomplex« in »Lotte in Weimar«*, in: *Modern Language Review* 59 (1964), S. 413-424.
 - P. Hacks, *Über den Stil in Thomas Manns »Lotte in Weimar«*, in: *Sinn und Form, Sonderheft. Thomas Mann*, 1965, S. 240-254.
 - L. Glatt, *Zur Echtheit eines Goethe-Zitates bei Thomas Mann*, in: *Goethe. Neue Folge des Jahrbuchs der Goethe Gesellschaft* 28 (1966), S. 310-314.
 - G. Lange, *Struktur- und Quellenuntersuchungen zur »Lotte in Weimar«*, Bayreuth 1970.
 - C. G. Evans, *Das Goethebild in Thomas Manns »Lotte in Weimar«*, in: *Monatsheft (Wisconsin)* 63 (1971), S. 105-116.
 - E. Heller, *Thomas Mann und das Klassische Betrachtungen über »Lotte in Weimar«*, in: *Die Klassik-Legende*, hg. von R. Grimm, J. Hermand, Frankfurt am Main 1971, S. 200-226.
 - H. S. Schulz, *Thomas Mann und Goethe*, in: *Thomas Mann und die Tradition*, hg. von P. Pütz, Frankfurt am Main 1971, S. 151-179.
 - W. Betz, *Lateinisches, Goethisches, Paragoethisches in Thomas Manns »Lotte in Weimar«*, in: *Deutsche Weltliteratur. Von Goethe bis Ingeborg Bachmann. Festgabe für J. A. Pfeffer*, hg. von K. W. Jonas, Tübingen 1972, S. 189-202.
 - J. Barta, *Vision oder Wirklichkeit?*, in: *Német Fiológiai Tanulmányok* (Debrecen) 9 (1975), S. 17-26.
 - W. Wysling, *Thomas Mann über »Lotte in Weimar«*, in: *Thomas Mann geboren in Lübeck*, hg. von J. Herchenröder, U. Thoemmes, Lübeck 1975, S. 102-114.
 - H. Kunisch, *Thomas Manns Goethe-Bild*, in: *Thomas Mann 1875-1975. Vorträge in München-Zürich-Lübeck*, hg. von B. Bludau, E. Heftrich, H. Koopmann, Frankfurt am Main 1977, S. 307-330.
 - H. Wysling, *Thomas Manns Goethe-Nachfolge*, in: *Jahrbuch des Freien Deutschen Hochstifts* 1978, S. 498-551.
 - H. Siefken, *»Lotte in Weimar«: Thomas Manns »Contactnahme« and His Novel about Goethe*, in: *Trivium* 13 (1978), S. 38-52.
 - P. Egri, *Die Stellung des Goethe-Romans von Thomas Mann in der Weltliteratur*, in: *Goethe Studien. Zum 150. Todestag des Dichters*, hg. von A. Mádl und L. Tarnói, Budapest 1982, S. 47-64.
 - B. Molinelli-Stein, *Größe als Gewissensfrage. Versuch einer psycho-existenziellen Strukturana-*

- lyse zu Thomas Manns Roman »Lotte in Weimar«, in: *Goethe Jahrbuch* 98 (1981), S. 182-224.
- H. Siefken, *Thomas Mann. Goethe, — »Ideal der Deutschheit«. Wiederholte Spiegelungen 1893-1949*, München 1981.
 - H. Siefken, *Thomas Mann Edits Goethe: »The permanent Goethe«*, in: *Modern Language Review* 77 (1982), S. 876-885.
 - H. R. Vaget, *Goethe. Der Mann von 60 Jahren. Mit einem Anhang über Thomas Mann*, Königstein/Taunus 1982.
 - H. Ohl, *Riemers Goethe, Zu Thomas Manns Goethe-Bild*, in: *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft* 27 (1983), S. 381-395.
 - J. Seidel, *Die Position des »Helden« im Roman. Zur Figuralstruktur in Thomas Manns »Lotte in Weimar«* in: *Goethe-Jahrbuch* 103 (1986), S. 207-234.
 - H. Lehnert, *Dauer und Wechsel der Autorität. »Lotte in Weimar« als Werk des Exils*, in: *Internationales Thomas-Mann-Kolloquium 1986 in Lübeck, Bern 1987 (Thoma-Mann-Studien VII)*, S. 30-52.

【訳者による文献リスト】

トーマス・マンおよびその他の作品・関連文献からの引用（訳文）に関しては、下記邦訳を参照させていただいた。

- 『トーマス・マン全集』全13巻（12巻＋別巻）新潮社 1971-1972年
- 『ゲーテ全集』全12巻 人文書院 昭和39（1964）年－昭和43（1968）年
- 『ゲーテ全集』全15巻＋別巻 潮出版社 1979-1982年
- トーマス・マン『ワイマルのロッテ』上・下 望月市恵訳 岩波文庫 昭和4-6（1971）年
- 下程息『《ファウストゥス博士》研究——ドイツ市民文化の「神々の黄昏」とトーマス・マン』増補版 北斗書房 2010年
- Erich Heller: *Thomas Mann. Der ironische Deutsche*. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1959（エーリヒ・ヘラー『トーマス・マン 反語的ドイツ人』前田敬作/山口知三訳 筑摩書房 1975年）。
- Katia Mann: *Meine ungeschriebenen Memoiren*. Hrsg. von Elisabeth Plessen und Michael Mann. Frankfurt a. M.: Fischer Taschenbuch Verlag 1974（カーチャ・マン『夫トーマス・マンの思い出』山口知三訳）。
- Erika Mann: *Das letzte Jahr. Bericht über meinen Vater*. In: *Thomas Mann: Autobiographisches*. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1966. S. 289-356.
- トーマス・マン『魔の山』（筑摩世界文学体系61）佐藤晃一訳 筑摩書房 1971年
- トーマス・マン『魔の山』Ⅰ・Ⅱ（世界文学全集 67・68）圓子修平訳 1980年
- トーマス・マン『魔の山』上・下 関泰祐・望月市恵 岩波文庫 ³1990年

- －トーマス・マン『非政治的人間の考察』上・中・下 前田敬作・山口友三訳 筑摩書房 1968-1971年
- －片山良展/義則孝夫編『トーマス・マン文学とパロディー 解体と継承』ドイツ文学研究叢書 1 クヴェレ会 1976年
- －片山良展/下程息/山戸照靖/金子元臣編『論集 トーマス・マン その文学の再検討のために』ドイツ文学研究叢書 9 クヴェレ会 1990年
- －脇圭平『知識人と政治——ドイツ・1914～1933——』岩波新書 1973年
- －須崎恵三『トーマス・マン——イロニーとドイツ性——』東洋出版 1985
- －須崎恵三『トーマス・マン——神話とイロニー——』東洋出版 2002年
- －山口知三『アメリカという名のファンタジー——近代ドイツ文学とアメリカ』鳥影社 2006年
- －山口知三『激動の中を書きぬく——二十世紀前半のドイツの作家たち』鳥影社 2013年
- －山口知三『三つの国の物語——トーマス・マンと日本人』鳥影社 2018年
- －松浦憲作『カタルシス——近代文学における人間嫌ひの文体——』同学社 1980年
- －福本圭太『〈青年の国〉 ドイツとトーマス・マン：20世紀初頭における男性同盟と同性愛』九州大学出版会 2005年
- －別府陽子『《ブッデンブローク家の人々》——《悲劇の誕生》のパロディとして』鳥影社 2023年
- －田村和彦『魔法の山に登る トーマス・マンと身体』関西学院大学出版会 2002年
- －田村和彦『ドイツ 庭ものがたり』関西学院大学出版会 2021年
- －船越克己『折々のドイツ文学——フォルスター/ホフマンスタール/グラス』同学社 2025年
- －林健太郎『ドイツ史(新版)』(世界各国史 3) 山川出版社 1978年
- －樋口忠治: *Higuchi GM Corpus. Text database von J. W. Goethe und Thomas Mann. Supported by the Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University.* (Access Number 19620. This site was opened on April 1st, 1999 and moved to the fllc domain on April 14th, 2016)
- －高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店 1971年
- －田中秀央・落合太郎編著『ギリシア・ラテン引用語辞典』新增補版 岩波書店 1979年
- －江川卓他編『増補改訂 新潮世界文学辞典』新潮社 1990年
- －『世界文学大事典』編集委員会編『集英社 世界文学大辞典』全6巻 集英社 1996-1998年
- －川口喬一/岡本靖正編『最新文学批評用語辞典』研究者出版 1998年
- －Thomas Mann: *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke-Briefe-Tagebücher.* Hrsg.

- von Heinrich Detering, Eckhard Heftrich, Hermann Kurzke, Terence J. Reed, Thomas Sprecher, Hans Rudolf Vaget und Ruprecht Wimmer. Frankfurt a. M.: S. Fischer 2001 ff. (= GKFA)
- Thomas Mann: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Hrsg. von. Hans Bürgin und Peter de Mendelssohn. 2. Auflage. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1974. (= GW)
- Thomas Mann: *Gesammelte Werke in Einzelbänden*. Lotte in Weimar. Hrsg. von und mit Nachbemerkenungen versehen von Peter de Mendelssohn. Frankfurt a. M.: S. Fischer Verlag 1982.
- Thomas Mann: *Dichter über ihre Dichtungen*. 3 Bde. Hrsg. von. Hans Wysling und Marianne Fischer. Zürich / München / Frankfurt a. M.: Heimeran 1975–1981. (= DüD)
- Thomas Mann: *Essays*. Hrsg. von Hermann Kurzke und Stephan Stachorski. 6 Bde. Frankfurt a. M.: S. Fischer. 1993–1997.
- Thomas Mann: *Notizbücher* 1–6 und 7–14. Hrsg. von Hans Wysling und Yvonne Schmidlin. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1991 / 1992.
- Thomas Mann: *Tagebücher 1911–1921 und 1933–1943*. Hrsg. von. Peter de Mendelssohn. *Tagebücher 1944–1955*. Hrsg. von Inge Jens. 10 Bände. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1977–1995 (トーマス・マン『トーマス・マン 日記』(1918–1921年, 1933–1955年) 全10巻 紀伊國屋書店 1985–2014年). (= Tb)
- Thomas Mann: *Briefe*. Bd. I: 1889–1936, Bd. II: 1937–1947. Bd. III: 1948–1955 und Nachlese. Hrsg. von Erika Mann. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1961–1965. (= Br)
- Thomas Mann: *Die Briefe Thoma Manns. Regesten und Register*. Bd. I. 1889–1933. Bearbeitet und herausgegeben, unter Mitarbeit von Yvonne Schmidlin (Thomas Mann-Archiv) von Hans Bürgin und Hans-Otto Mayer. Mit einem Vorwort von Hans Wysling. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1976. (= Reg)
- Thomas Mann: *Thomas Mann an Ernst Bertram. Briefe aus den Jahren 1910–1955*. Hrsg. von Inge Jens. Pfullingen: Neske 1960. (= BrB)
- Hans Bürgin / Hans Otto Mayer (hrsg.): *Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens*. Frankfurt a. M.: S. Fischer 1965.
- Gert Heine / Paul Schommer (Hrsg.): *Thomas Mann Chronik*. Frankfurt a. M.: Vittorio Klostermann GmbH 2004.
- Johann Wolfgang von Goethe: *Goethes Werke*. Bd. 1–143. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. (Bd. 144. Zum Gebrauch. Supplementband zur Weimarer Ausgabe. Erarbeitet von Dieter Fuchs) Weimar: Verlag Hermann Böhlaus Nachfolge 1999. (WA)

- Johann Wolfgang Goethe: *Goethes Werke. Hamburger Ausgabe* in 14 Bänden. Hrsg. von Erich Trunz. Hamburg (jetzt in München): Christian Wegner Verlag ³1966. (=HA)
- Johann Wolfgang Goethe: *Goethe. Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche*. 24 Bde. und 3 Ergänzungsbände. Hrsg. von Ernst Beutler u.a. Zürich / Stuttgart: Artemis Verlag 1948-1971. (=A)
- Johann Wolfgang Goethe: *Goethe. Berliner Ausgabe. Berlin* (Ost) und Weimar: Aufbau 1965 ff. (=BA)
- Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe*. 21 Bde. (in 26) Hrsg. von Karl Richter u.a. München: Carl Hanser 1985-1998. (=MA)
 [Bd. 8-1 und 8-2 *Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe in den Jahren 1794 bis 1805*. Hrsg. von Manfred Beetz. 2 Bde. München: Carl Verlag 1990] / Friedrich Schiller, Johann Wolfgang Goethe: *Der Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe*. Hrsg. von Emil Staiger. Revidierte Neuausgabe von Hans-Georg Dewitz. Mit Illustrationen. Frankfurt a. M. und Leipzig: Insel Verlag 2005. / Friedrich Schiller, Johann Wolfgang Goethe: *Der Briefwechsel. Historisch-kritische Ausgabe*. Hrsg. und kommentiert von Norbert Oellers unter Mitarbeit von Georg Kurscheidt. 2 Bde. Stuttgart: Philipp Reclam jun. 2009 (『ゲーテ＝シラー往復書簡集』上・下 森淑仁/田中亮平/平山令二/伊藤貴雄訳 潮出版社 2016年).
- Marianne und Johann Jacob Willemer: *Briefwechsel mit Goethe. Dokumente, Lebens / Chronik, Erläuterungen*. Hrsg. von Hans-J. Weitz. Frankfurt a. M.: Insel Verlag 1965.
- Johann Wolfgang Goethe: *Sämtlich Werke, Briefe, Tagebücher und Gespräche*. Frankfurt a. M.: Deutsche Klassiker Verlag 1985-2013. (FGA)
- Johann Wolfgang Goethe: *Goethes Gespräche* in vier Bänden. Eine Sammlung zeitgenössischer Berichte aus seinem Umgang auf Grund der Ausgabe und des Nachlasses von Flodoard Freiherrn von Biedermann. Ergänzt und herausgegeben von Wolfgang Herwig. Zürich und Stuttgart: Artemis Verlag. (フロードアルト・フォン・ビーダーマン男爵編『ゲーテ対話録』全5巻 白水社 1962-1970年).
- Johann Wolfgang Goethe: *Briefe an Auguste Gräfin zu Stolberg*. Bad Homburg v. d. H. / Berlin / Zürich: Verlag Gehlen 1968.
- Bernd Witte, Theo Buck, Hans-Dietrich Dahnke, Regine Otto, Peter Schmidt (Hrsg.): *Goethe Handbuch* in vier Bänden. Stuttgart u. Weimar: Verlag J. B. Metzler 2004.
- Benedikt Jeßling, Bernd Lutz und Inge Wild: *Metzler Goethe Lexikon*. Personen – Sachen – Begriffe. Zweite, verbesserte Auflage. Mit 150 Abbildungen. Stuttgart / Weimar: Verlag J. B. Metzler 2004.
- 相良守峯『ゲーテ事典』河出書房 昭和25 (1950) 年
- Franz Götting: *Chronik von Goethes Leben*. Frankfurt a. M.: Insel-Verlag 1963.
- Franz Nicolai: *Zeittafel zu Goethes Leben und Werk*. München: Verlag C. H. Beck 1977.

- Bernhard Gajek / Franz Götting (Hrsg.): *Goethes Leben und Werk in Daten und Bildern*. Frankfurt a. M.: Insel-Verlag 1966.
- Walter Hoyer (Hrsg.): *Goethe's Life in Pictures*. Translation of the biographical texts: Edith Anderson. Leipzig: VEB Edition 1963.
- Peter Boerner: *Goethe. Mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*. Reinbeck bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuchverlag 1964 (ペーター・ベールナー『ゲーテ』桜井正寅訳 理想社 1967年).
- 手塚富雄『ゲーテ』(人類の知的遺産 45) 講談社 昭和57 (1982) 年
- Friedrich Gundolf: *Goethe*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1963
(フリードリヒ・グンドルフ『若きゲーテ』小口優訳 未来社 ²1970年
フリードリヒ・グンドルフ『古典期のゲーテ』小口優訳 未来社 ²1970年
フリードリヒ・グンドルフ『晩年のゲーテ』小口優訳 未来社 ²1971年).
- Albert Bielschowsky: *Goethe. Sein Leben und seine Werke*. In zwei Bänden. Neubearbeitet von Walther Linden. München: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung (Oskar Beck) 1920 (アルベルト・ビルショフスキ『ゲーテ その生涯と作品』岩波書店 1996年)
- Emil Staiger: *Goethe*. In drei Bänden. (Bd. I: 1749-1786, Bd. II: 1786-1814, Bd. III: 1814-1832) Zürich: Atlantis Verlag AG 1963 (エーミール・シュタイガー『ゲーテ』(上) 1749-1786, (中) 1786-1814, (下) 1814-1832 三木正之他訳 人文書院 1981-1982年).
- Karl Otto Conrady: *Goethe. Leben und Werk*. Düsseldorf: Patmos Verlag GmbH & Co. KG 2006 (カール・オットー・コンラーディ『ゲーテ 生活と作品』上・下 三木正之/森良文/小松原千里/平野雅史 共訳 南窓社 2012年).
- Richard Friedenthal: *Goethe. Sein Leben und seine Zeit*. R. Piper & Co. Verlag 1963 (リヒアルト・フリーデントール『ゲーテ——その生涯と時代』上・下 平野雅史/森良文/小松原千里/三木正之 共訳 講談社 昭和54 (1979) 年).
- Helmut Koopmann: *Goethe und Frau von Stein. Geschichte einer Liebe*. München: Verlag C. H. Beck 2002.
- Helmut Koopmann: *Willkommen und Abschied. Goethe und Friederike Brion*. München: C. H. Beck 2014.
- Dagmar von Gersdorff: *Marianne von Willemer und Goethe. Geschichte einer Liebe*. Frankfurt a. M. und Leipzig: Insel Verlag 2003.
- Dagmar von Gersdorff: *Goethes Späte Liebe. Die Geschichte der Ulrike von Levetzow*. Frankfurt a. M. und Leipzig: Insel Verlag 2005.
- 柴田翔『内面世界に移る歴史——ゲーテ時代ドイツ文学史論』筑摩書房 1986年
- 柴田翔『詩に移るゲーテの生涯』丸善ライブラリー 186 平成8 (1996) 年〔2019年に、鳥影社から改訂増補版が出ている〕
- 林正則『ゲーテのイタリア旅行前後——「古典主義」の生成をめぐって』大阪大学博士論文 1998年

- －高橋義人『形態と象徴 ゲーテと「緑の自然科学」』岩波書店 1988年
- －大槻裕子『ゲーテとスピノザ主義』同学社 2007年
- －ゲーテ『ファウスト』三木正之訳 南窓社 2015年
- －ゲーテ『ファウスト』糸川麻里生訳
- －小栗浩『《西東詩集》研究——その愛を中心として——』郁文堂 1972年
- －福田英男『ゲーテの叙情詩研究』郁文堂 1978年
- －波田節夫『初期ゲーテとヴィーラント』ドイツ文学研究叢書7 クヴェレ会 1985年
- －小栗浩『人間ゲーテ』岩波新書 1978年
- －星野慎一『ゲーテ』新装版 清水書院 ²2018年
- －手塚富雄『いきいきと生きよ』講談社現代新書 ¹³1975年
- －小塩節『ファウスト——ヨーロッパ人間の原型——』日本 YMCA 同盟出版部 ²1975年
- －中井真之『ゲーテ《親和力》における「倫理的なもの」』鳥影社 2010年
- －新妻篤『ゲーテ《悲劇 ファウスト》を読みなおす』鳥影社 2015年
- －Hans Cassirer: *Idee und Gestalt. Goethe • Schiller • Hölderlin • Kleist*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1989 (エルンスト・カッシーラー『理念と形姿 ゲーテ・シラー・ヘルダーリン・クライスト』三修社 1978年).

- －Friedrich Schiller: *Schillers Werke. Nationalausgabe*. Begr. von Julius Petersen. Weimar: Verlag Hermann Böhlaus Nachfolger 1943ff.
- －Friedrich Schiller; *Sämtliche Werke*. 5 Bde. Hrsg. von Gerhard Fricke und Herbert G. Göpfert. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1989.
- －Friedrich Schiller: *Werke und Briefe in 12 Bänden*. Hrsg. von Otto Dann u. a. Frankfurt a. M.: Deutscher Klassiker Verlag 1992.
- －フリードリヒ・シラー『シラー選集』全六巻 新関良三編 1941－1946年
- －Helmut Koopmann (Hrsg.): *Schiller-Handbuch*. 2., durchgesehene und aktualisierte Auflage. Stuttgart: Alfred Kröner Verlag 2011.
- －Emil Staiger: *Friedrich Schiller*. Zürich: Atlantis Verlag AG 1967 (エーミール・シュタイガー『フリードリヒ・シラー』神代尚志/森良文/吉安光徳他訳 白水社 1990年).
- －Rüdiger Safranski: *Friedrich Schiller oder Die Erfindung des Deutschen Idealismus*. München: Deutschen Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG 42010.
- －Siegfried Damm: *Das Leben des Friedrich Schiller*. Eine Wandlung. Frankfurt a. M. und Leipzig: Insel Verlag 2004 (ジークリット・ダム『フリードリヒ・シラーの生涯』中村元保/渡邊洋子訳 同学社 2009年).
- －新関良三『シラー戯曲研究《群盗》』三修社 1982年
- －内藤克彦『シラーの美的教養思想——その形成の展開の軌跡』三修社 1999年